

緑爽会会報 No. 193

2024年8月26日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 荒井正人



デザイン・制作 関塚貞亨

〜〜 《報告》 〜

7月行事報告

7月3日 さがみこベリーガーデン探訪

参加者 13名：田村佐喜子、鳥橋祥子、島田稔、辻橋明子、富澤克禮、山川陽一、夏原寿一、川口章子、西谷隆亘、西谷可江、中村好至恵、荒井正人、小林敏博

会報 191 号でさがみこベリーガーデンが 5 年目に入ると、山川さんから寄稿いただいていたこともあり、何が変わったのかも興味のあるところであった。当初は 7 月下旬を予定していたが、今年は実のつき方が早いとのことで、急遽早めることとした。そのことで会員の皆さんにご迷惑をおかけすることになった点、お詫びいたします。

さて当日は富澤さん、中村さんが車を出してくださったおかげで、バスを使わずに早くに現地へ行くことができた。それでも BBQ の下ごしらえなどは時間もかかり、川口さんなど女性軍におんぶにダッコであった。当日は梅雨の合間の晴れとなつて暑い上に、BBQ の炭火が強烈で、太陽と火力の挟み撃ちにあっているようなものだから、焼いてくださった小林さんや中村さんは、もの凄く暑い思いをされたと思う。あつという間に焼けるのでどんどん食べないといけない。まさかこんな天気になるとは思ったが、今後の BBQ 実施に当たっては季節を考慮しないとけないと思ったことであった。



社長の説明に耳を傾ける

それでも屋外での飲食は楽しく、しっかり様々な種類のブルーベリーを摘んでは口に運び、これが甘いとか酸っぱいなど品評しながら、持

目次

ページ

《報告》

1. 7月行事報告：7月3日
さがみこベリーガーデン探訪
2. 7月13日 暑気払い

《寄稿・投稿》

3. 神谷恭さんがお持ちだった『大菩薩連嶺』 小林 敏博
4. 山の歌『ひとりの山』に想う 小清水 敏昌
5. 山岳会設立の頃〈20世紀初頭の東京〉① 代々木の縁、志賀重昂と花袋 南川 金一
6. 憧れの緑爽会 新入会員 岡 義雄
7. 『緑爽会』に入会させていただきました 新入会員 岡田 陽子
8. 山口節子さん さようなら 近藤 緑

《ようこそ、ルームへ》

11. 松本ぼんぼん 田村 佐喜子

《予告など》

12. 秋の山行
編集後記・次号予告

ち帰り用の実を摘み採る。摘みとった実をアレンジしてケーキを作り、美味しくいただいた。希望でスムージーを作った方もいた。将来はワインも作るということで、新しく葡萄を栽培するエリアには既にパネルが設置されており、そこを見学し、山川勇一郎社長からも説明を受けた。あっという間に3時間ほどが経ち、また今度と思って散会した。 (報告・写真：荒井正人)

7月13日 暑気払い

参加20名：後掲写真参照 場所：「西安市ヶ谷店」

13日の土曜日に、こうした行事に初めて参加となる高橋清輝さん、入会されたばかりの岡義雄さんが出席、遠方からは平野さんも出席され、恒例となった感のある「西安」での暑気払いが開催された。また、3日のさがみこベリーガーデンに引き続き、西谷ご夫妻が参加されたが、こうしてお元気に会の行事に参加いただけることは嬉しいことである。今回は初めての試みで、座席をくじで決めることにした。もちろん全く固定ではなく、宴がたけなわになれば移動はできる形である。

冒頭、代表より、欠席会員の近況が伝えられた。大雨・洪水にみまわれている秋田在住、福田さんからは被害はないとのメールがあったこと、訪問したばかりのベリーガーデンの山川さんからは、最近地域にサルが出没して対策に追われていることなどが紹介された。

川嶋さんによる乾杯の音頭で開宴し、しばらくの飲食の後、皆さんから近況を簡単に話していただいた。今回は近藤緑さんから山梨のワイン2本が差入れされたが、アッという間に空になった。

全員で写真を撮って解散とした。ルームでの飲食が禁止となって、こうした店での開催となった経緯があるが、市ヶ谷周辺にこだわる意味も薄れており、場所、時間帯や運営面も含め、今後の暑気払いや忘年会のあり方を検討していく時期になっていると考えさせられた。

(報告：荒井正人、写真：石塚嘉一)



(後列左より) 荒井正人、西谷可江、竹中彰、平野紀子、夏原寿一、富澤克禮、渡部温子、高橋清輝、小清水敏昌、小原茂延、辻橋明子、小林敏博、鳥橋祥子、石塚嘉一
(着席左より) 西谷隆亘、近藤緑、川嶋新太郎、島田稔、川口章子、岡義雄

神谷恭さんがお持ちだった『大菩薩連嶺』

小林 敏博

若い頃、大菩薩周辺の明るい稜線を好んでいく度も歩いたことから霧の旅会の松井幹雄が著わした『大菩薩連嶺』（昭和4年、光大社刊）を読みたくて、また手元に置いておきたくて神保町などの古書店に毎月数回は足を運んでいた。馴染みの古書店主に頼めば早晚手に入れることは可能なはずだが、そうしなかったのは立ち寄った古書店の棚に並んだ背表紙を順繰りに眺めて「やっと見つけたあ！」という感動を味わいたかったのかもしれない。ただ、そういう探し方をしたので、会うのに7、8年はかかってしまった。数10年以上前のことである。

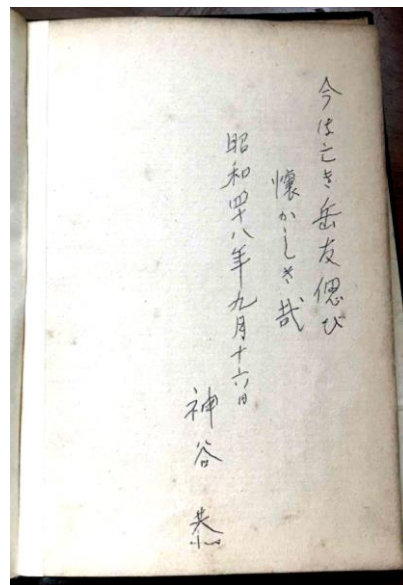
その古書店は神保町の悠久堂書店だったか阿佐ヶ谷の和久井さんの店だったかなぜか記憶に残っていない。帰宅してさっそく机に置いて眺めてみた。『大菩薩連嶺』は函入りの本だが、買い求めたものは長い間使っていたようで、函はなく日に焼け擦れて汚れていた。4つの地図が奥付の手前に綴じられているが、『大菩薩連嶺及其附近概念図』だけが剥がれ、丁寧に折りたたまれて該当個所にはさまれていた。裏の見返しには大森の古書店の汚れたシールが貼られているので2つ以上の店に並べられていたものが私の手元に来たようだ。

扉を開いてみた。序の向かいページに『今は亡き岳友偲び懐かしき哉 昭和四十八年九月十六日 神谷恭』とボールペンによる少し震えるような字で記されていた。目次をめくると4ページ目に『雁ヶ腹摺山より姥子山へ』の見出しに赤鉛筆で線が引かれ筆者は神谷恭とあった。また、20を超える口絵の写真の中に大峠から撮った冠雪した富士山の写真『大峠の富士』の下にある『神谷恭氏撮影』の部分をボールペンで丸く囲っている。その当時、神谷さんをまったく存じ上げなかったのも、「ああ、霧の旅会の会員ご本人がお持ちだった本なのだろう。ご本人が亡くなられた後、家人が古本屋に出したのかな」とだけ思った。

それから大分経ってから、たまたま望月達夫さんの『忘れえぬ山の人びと』（1986年、茗溪堂刊）を読んでいると、前半に神谷さんとの交流の思い出が記されていた。この時、神谷さんが日本山岳会の会員であることを初めて知った。私が入会するずっと前のことである。

今年5月に図書委員会主催の『山岳図書を語る夕べ』で石黒敦彦さん（尾崎喜八の孫）が講演された。石黒さんのお話しはお孫さんだからこそ普段聞くことのできない貴重なものだったが、司会の近藤雅幸さんが「尾崎喜八さんの日本山岳会入会の推薦者は松井幹雄さんと神谷恭さんでした」との紹介に改めてそうなのかと思った。

松井さんと神谷さんとは会の代表、会員の関係だけではなく尾崎さん入会の推薦者なのでかなり親しくお付き合いをしていただろうことが推測された。『山岳 1974/Vol. 69』によれば神谷さんが生涯を終えられたのが昭和49年5月20日とあるので、亡くなる8ヵ月前の筆跡である。1933（昭和8）年、若くして鬼籍に入った松井さんを、40年を経ても懐かしく偲びこの本に記したのかもしれない。講演会から帰宅して改めて『大菩薩連嶺』を久しぶりに開いてみた。その筆跡を眺めながら神谷さんと松井さんの関係をしばらくは想像していた。



山の歌『ひとりの山』に想う

小清水 敏昌

山の歌は数多くある。大学山岳部の歌や、広く一般の人たちに歌われている歌もある。そうした数多くの山の歌のなかで、『ひとりの山』（下記参照）は私が好きな歌の一つである。メロディーがゆったりしている上に哀愁を帯びているので、やや寂しい感じを与える。歌詞をじっくり読むと、文学的な感さえある。それぞれの歌詞の後段に文学的な香りが漂う。

例えば、三番の歌詞は他とはやや趣を変えている。前段はかなり感傷的な出来事を述べていて、後段ではがらりと雰囲気を変え、個人の想いはつづらずに客観的な情景をのせている。普通ならば、出来事があったのだから何か自分の想いや感傷的な言葉がきても良いと思うが、そうではない。このへんが言葉をよく選び、作詞としての巧みなどころだと私は勝手に思っている。一方で、他の三つの歌詞は一人の岳人の行動を通じた情景を、素直に詠っている。歌詞を読んで、山好きな人は情景が浮かび、その雰囲気に納得するのではないだろうか。

- 一 山に憧れ 山に行き 言葉少なく ただ歩む
- 二 雪溪滑りて 岩場を登りや ふれる岩肌の 冷たさよ
- 三 恋に破れて 夢に破れ 夕日静かに 山に沈む
- 四 ひとり寂しく 佇ずめば タバコの煙 ただひとすじ

実は、この歌について思い出がある。薬学の大学時代は山岳同好会に入っていた。そのなかに、Tさんという2年上の先輩がいた。この先輩、瘦身でありながら共に行った夏の合宿の南アルプス南部の縦走や正月の八ヶ岳の冬山などにおいて強靱で、いつも落ち着いていて穏やかな性格。我々後輩の憧れの先輩であった。この先輩がよく口ずさんでいた歌がこの歌であった。当時は題名も知らず、歌い易くなかなかいい歌だなと思って教えてもらい、山ではよく歌っていた。

大学時代、私は山岳の先輩がいる研究室などによく顔を出していたこともあり、この先輩の教室にも行って雑談などをしていた。秋の大学祭が終わった頃に、この先輩の同級生で顔見知りの女性Mさんに声を掛けられ、お茶の水駅前の喫茶店に連れていかれた。そこで先輩のTさんのことについて話が出たのには驚いた。Mさんが先輩に好意を寄せていた事を知り、緊張したことを憶えている。Mさんは美人であり成績が優秀で特待生だと聞いていた。こんなことが2、3回あってから、TさんにMさんのことを聞いてみた。先輩もある程度は気づいていたようで「そうか」と言ったきりだった。先輩たちの卒業試験が終わった3月の始めごろ、Mさんに最後に会ったときには「私はもう諦めたわよ」と言って少し寂しそうだった。二人の間に何があったのかは知る由もない。

こんな思い出があり、この歌を聞くと山の先輩を思い出し非常に懐かしさを覚える。ごく最近、T先輩にMさんのことを尋ねたら「旦那さんの仕事で一緒にアメリカに行ったと聞いたけどなあ」とのことであった。先輩共々、私たち青春時代の淡い思い出である。

「山の唄を歌う会」（世話人 石井秀典会員）は、月末の午後に八王子の生涯学習センターで開催されている。関心のある方は是非ご参加ください。最近この会に出席して、何十年振りに『ひとりの山』を歌い、懐かしい思い出が蘇った。

なお、この歌の作詞および作曲は持摩^{もちざい}（磨）公英^{きみひで}であり、歌の前後には詩が添えられている。

代々木の縁、志賀重昂と花袋

南川 金一

明治44年、代々木駅近くの山手線外側の風景を描いた田山花袋の日記がある。「忘れもしない。五年前のけふは、牛込の山の手から、ここに新たな家を建てる計画をして、大工と請負師と一緒にやって来て、初めて縄を引いて見た日だ。その頃のこゝは、まだ代々木野の一部で、周囲は殆ど野原であった。ブリキ屋根の家が一軒、牧場のある牛乳屋が一軒、貧しい労働者の住んでいる長屋が、遙か向こうに一軒、前も後も皆芋畑、麦畑、大根畑などであった。……五年のうちに野が町になった。麦畑や田が賑やかな便利な屋敷町になった」（「文章世界」に載った花袋の日記＝平凡社『明治東京逸聞史』から）。花袋の年譜には「1906（明治39）年12月、36歳、代々木山谷132に住宅新築移転」とある。現在の代々木3丁目、代々木駅の西10分ほどの所である。甲武鉄道の代々木停車場は明治39年の開設だが、山手線の代々木停車場開設は明治42年だった。花袋の日記はその頃の代々木の変貌をリアルに描いている。

本稿⑩で書いた、四松庵での山岳会晩餐会への出席者に田山録彌（花袋）の名前があることは知っていたが、花袋の住所が代々木であることまでは記憶していなかった。四松庵の所在地が代々木山谷であったことは、東京府が発行した『東京府豊多摩郡誌』（大正5年）で分かった。しかし番地までは書いていない。志賀重昂について、身内が編集した本が山岳会に寄贈されてきて図書室にあるのを思い出した。『生誕百三十年記念誌 志賀重昂』（1994年、編集・発行戸田博子）で、その年譜によって四松庵の所在地は代々木山谷128であったと判明した。小島烏水の「四松庵雑記」に「本年十三歳と承はった学校制服の富士男君も席に見えられた」とある、その志賀富士男氏の娘さんが編集者の戸田博子さんだということも、その本から分かった。

明治44年発行の『豊多摩郡代々幡村全図』には番地まで載っている。その地図での新発見は縮尺が「五千分一之尺」であること、文字どおり「縮尺」である。距離をメートルに換算しないとピンとこない。四松庵の128番地と花袋の132番地の間は200メートルほど、5分もかからない距離である。二人の間に何かかわりがあったのか、偶然だったのか、それは分からない。花袋が転居した4年後に、四松庵が完成して披露パーティーが開かれたことは花袋も知っていたはずである。四松庵で山岳会の晩餐会が開かれるとあれば、「何はともあれ…」という思いになるのは当然である。志賀重昂と花袋は7歳違いだったが、志賀は国会議員をも経験した知名士。花袋は、明治36年から山崎直方・佐藤伝蔵の『大日本地誌』編纂を手伝っていて、山岳会会員となった地理学者ともかわりがあったようだから、志賀重昂とも接点があったかもしれない。

花袋は1930（昭和5）年、自宅で死去した。59歳だった。渋谷区教育委員会による「田山花袋終えんの地」碑が代々木3丁目9番地に建っている。古い地図の代々木山谷132番地の隣の一画のように思われた。周囲はマンションとアパートで、とりわけ甲州街道脇に建つ文化学園の21階建ての巨大な校舎群が城壁のように聳える風景と、花袋が描く明治時代の風景との大きな違いに感慨を覚えた。甲州街道は昔も今も変わっていない。甲州街道から南へ折れて、昔の代々木山谷へと入っていく道も、入口こそ階段状になっている（甲州街道が中央・総武線と立体交差するので、このあたりから上り坂になるため）ものの以前のままでのようである。元は凹状の地形だったので。道は傾斜地を下って、坂道を登り返している。小島烏水が車夫から、「旦那ちょっと下りて…」と言われたのはここだったのかと思うと、可笑しくなった。“兵（つわもの）どもが夢の跡”ながら、四松庵があったと思われるあたりには何の痕跡も残っていなかった。

憧れの緑爽会

岡 義雄

5 万分の I 地形図上で当日歩いてきた所に赤い線を引く時の達成感が何とも心地よく、駄馬のごとくやみくもに歩き回ってふと気が付くと 80 歳も後半になっていました。高齢者お決まりの成人病が発症し、歩くことに制約が出始めた頃から次第に文化的な活動に興味を持つようになり、来年 120 周年を迎える日本山岳会にあって、その歴史と文化の香りが高い活動をされている「緑爽会」の存在が脳裏に浮かぶようになりました。しかし、駄馬がサラブレッドのグループに仲間入りするには敷居が高すぎて躊躇していましたが、今年 4 月、多摩支部の「低山を楽しむ会」の通称「ノラボウ山行」で、緑爽会の重鎮の方々にお会いしたのを契機に思い切って入会させていただくことに致しました。

＜駄馬の足跡＞

- * 中学 3 年(1952)の時、林間学校で大菩薩嶺に、また兄姉に連れられて富士山に登ったのがきっかけで登山に興味を持ちました。
- * 大学 3 年の時、既存の山岳部やワングルとは別に、同じ学部の同学年の仲間だけで「理学部山の会」を結成し、穂高→劔、北鎌尾根などの縦走や、涸沢をベースに前穂北尾根、滝谷などの岩登り、正月の鹿島槍、自分の卒業式をサボって仲間の前穂東壁登攀のサポート等、登山に明け暮れました。
- * 卒業後、ヒマラヤを目指す山岳部の仲間に誘われて一緒に JAC に入会(1961 年 No.5253)。入会直後の年次晩餐会で、当時の会長の日高信六郎氏、副会長の三田幸夫氏などの方々とのビールの入ったグラスを片手に話が出来たことや、山岳部の仲間がヒマラヤのどの山を目指すかの相談で、私も一緒に深田久弥氏宅(世田谷)を訪れたことなど、この上ない財産になりました。
- * 高度経済成長時代の企業戦士として仕事に励んでいた約 30 年間は、一時 JAC を退会していましたが、2007 年に再入会しました。
- * 2006 年に退職した後は、野山を歩くことが新しい仕事となり、駄馬の生活が始まりました。4 年かけて、おくのほそ道を踏破。過去に登った山を含めて一筆書き登山として、①我家から親不知海岸まで、②我家から駿河湾まで、③紀伊半島縦断(関ヶ原→潮岬)などを歩きました。
- * 還暦を迎えてすぐに、学生時代の仲間と、ヨーロッパ中心の海外トレッキングに行き始め、アルプスのピークにも足跡を残すことが出来、古稀の前祝いにモンブランに登りました。レビューファの「モンブランからヒマラヤへ」に肖^{あやか}って、翌年から 3 回(年)ヒマラヤにも出かけ、8000m の山々を遠望してきました(ゴキョピーク、アンナプルナ内院、マナスル周回)。



モンブランをバックに

この度新しく、サラブレッドの仲間入り致しました。どうぞよろしくお願ひ致します。

『緑爽会』に入会させていただきました

岡田 陽子

○日本山岳会入会は 2001 年。紹介者は元日本山岳画協会代表、故・牧潤一画伯、元日本山岳会会長、故・村木潤次郎氏。山岳画コレクターの友人に誘われて銀座の朝日アートギャラリーの牧画伯の個展を訪れた際、たまたま登ってきたばかりのマッターホルンの絵、それもイタリア側から描いたチェルビニア（イタリアではこう言う）の油絵を購入させていただいたのが縁でした。3年間駐在した北イタリアのミラノでは、雪が降ると子供たちを連れて毎週末、チェルビニアの麓にあるスキー場に出かけたものでした。この後、牧先生が 83 歳で亡くなられるまでアトリエにうかがい、個展のお手伝いをしました。

○所属は東京多摩支部、北海道支部、越後支部の会友。東京多摩支部では自然保護委員、野火止保全林の会、低山を楽しむ会などに。同好会は「山遊会」、「麗山会」に所属。先日もサクユリ、オオシマツツジの咲く神津島・天上山に。「高尾の森づくりの会」は 24 年目？

○今年の夏は 23 日間、牧先生が折にふれて話しておられた『パキスタン・バルトロ氷河～K2 大展望』の山旅に出かけました。炎天下の中を 8 時間の歩行、氷河上に張るテントは夜になると氷点下となり 70 歳を過ぎた身には過酷でしたが、延々と針峰群の連なる風景は圧巻で、コンコルディアから仰ぎ見る 8611m の K2 の迫力には心底圧倒されました。7 月 8 日、スカルドゥからイスラマバードに戻り、15000 人を収容できるというファイサル・モスクに立寄った際、「平出さんを 1 週間前、ここに案内した」とガイドさん。7 月 27 日の K2 西壁 7000m 付近での平出和也さん、中島健郎さんの滑落事故は、残念でなりません。

○『パリオリンピック 2024』が開催され、文化とスポーツの融合が世界を魅了しています。20 歳代～50 歳代にかけて 5 年、5 年、2 年と 12 年間過ごしたパリが懐かしく、つつい TV に見入ってしまいます。1950 年、人類最初の 8000m 峰アンナプルナ I 峰の登頂が、エルゾグ隊長率いるフランス隊によってなされ、凍傷を負ったエルゾグ氏は、パリのアメリカ病院で療養中に「処女峰アンナプルナ」を口述筆記したのだとか。登頂した年に私は生まれ、25 年後の 1975 年に同病院の産科で長女を出産。その頃、ギリシャの大富豪オナシス氏がここで療養後に亡くなり、後にスポーツ大臣にもなったエルゾグ氏は、おそらく初登頂を成し遂げた「英雄」として VIP 待遇の療養だったことでしょう。

○緑爽会のことは、2003 年から 17 年ほど本部総務委員だった頃、近藤緑さんがお仲間と会報の印刷作業をされているのをお見かけし、また、同郷の吉田さん、島田さんからお話を。先号に吉田さんが書かれた、櫻井昭吉さんの追悼文を読ませていただき、2013 年 4 月下旬、東京多摩支部の「六万騎山カタクリ観察会」で、マイクロバスの一行 20 名を、櫻井さん、吉田さん、名誉会員だった伯父をよく知る越後支部の方が、40 数年ぶりだという雪の中を案内してくださったことを懐かしく思い出しました。

よろしく願いいたします。



1968 年 体育会山岳部女子部 夏山縦走
「奥大日岳」で (中央)

《追悼》

山口節子さん さようなら

近藤 緑

緑爽会名簿の筆頭にあった山口節子さんが、3月16日11時1分、お住まいの近く稲毛駅前で交通事故のため亡くなりました。駅前の横断歩道を渡ると、地元の農水産物を揃えた格安スーパーへは少し後戻りするの、横断歩道の少し手前を渡ろうとしたのです。以前の節ちゃんなら、何でもなかったでしょう。でも最近、杖を使うようになっていたので、渡り切れずに轍に蹂躪されてしまいました。

節ちゃんとは長い長いおつきあいでした。戦後まもなく疎開先から東京へ戻った節ちゃんと私は、下町で焼け残った都立小松川高校で知り合いました。高校時代の節ちゃんは、バレーボール部のキャプテンでした。小さな体で、高くジャンプして、ネットを越えてくる相手側のボールを弾き返していました。私はといえば、当時は重い肺結核で、体育の授業はいつも見学。でも論文を提出すれば、アヒルさんのような2の評価は貰えましたから、無事に卒業はできました。入院や手術で出席日数が不足と知った時から学校を休学して図書館や映画、演劇を見て歩いたりして一年落第したので、卒業年度は節ちゃんの方が先輩です。

今でも、その頃の女子の体育着だった、ちょうちんブルマー、ひだをたたんだブルマーをはいた節ちゃんが目に浮かびます。あの節ちゃんが先に死ぬなんて。信じられないし、認めたくない気持ちです。

3月18日、早々と節ちゃんの「偲ぶ会」が稲毛の葬祭場「セレモ」で行われ、日本山岳会の橋本しをり会長も出席されて弔辞を読んでもくださいました。お棺の中の節ちゃんは、美しくお化粧されて、お人形のように優雅でしたが、「こんなの節ちゃんじゃない」と、私の心は「起きてよ、節ちゃん」と激しく反発しました。

稲毛の「セレモ」からお棺と私たち友人を乗せたバスと、それに続くマイカーの列が、東京のはずれの都留の焼場まで1時間半かけて到着。最後のお別れをした後、焼きあがるまでの時間は昼食をいただきながら、こもごも思い出を語り合いました。私の知らない方も多く、節ちゃんの交際範囲の広いことを実感しました。

お骨あげした遺骨を持って、平和公園の中にある都営墓地へ。そこに、かねて用意のお墓があって、納骨した後、またバスで参列者を足の便のよい場所まで送りました。私たち都内の者は阿佐ヶ谷まで送ってもらいました。一日で葬儀から納骨までやってしまうというシナリオは、ひとり身の節ちゃんが、生前に用意しておいたに相違なく、葬主である弟の博之さん、葬儀委員長の姪の老川千津子さんによくよく言い含めてあったに違いありません。

本来なら、このような席で節ちゃんについて話をするのは、節ちゃんが一番の親友だった宮澤美渚子さんだった筈です。宮澤美渚子さん—この名前は登山を愛する人なら、よくご存知と思います。

1998年10月8日、解禁されたばかりのヒマラヤ・クラウン峰に初登頂して、山岳史上輝かしい記録を残した、あの宮澤さんです。節ちゃんと宮澤美渚さんは、親友であると同時によきライバルでもありました。初登頂した宮澤さん、片や節ちゃんは、モルテブラン女子登山隊の隊長でした。



昨年11月の小泉弘さんの講演会に出席されていた山口節子さん（左後方）

隊長は実力と共に、皆の信頼がなくてはつとまりません。そして二人とも猫が大好きでした。

栄光の宮澤美渚子さんも、ご主人の憲さんに先立たれた後、転倒して腰骨に輝が入り、びっこをひくようになりました。その上、同居していた一人息子さんは、日産自動車のセールスマンとしての実績をかわれて東北支社の支社長となり、夫婦ともに任地に行ってしまいました。勝気な宮澤さんはグチひとつ言わず二人を送り出しましたが、自分一人のために料理する気にならず、すぐ近くの店で深大寺そばを食べるのが日課になっていました。栄養の偏りを心配した節ちゃんは、稲毛の干物や日持ちのするクッキーなどを宅急便で送っていました。耳が遠くなってベルが鳴っても出て来なくなると、宮澤さんのご主人の工務店の跡を借りている植木屋さんを受取人にして、彼が外階段でベランダまで運び上げるようにしました。そうすれば、美渚子さんの使っている、中二階のリビングから荷物が見えるので、ガラス戸を開けて取り込めばいいのです。

「要介護者同士の訪問は、万一の時は警察沙汰になります」とケアマネさんから言われている私は、一人で訪問することができません。せめて手近で買えるワインや生活必需品を送ることぐらいです。そんな私たちに「宮澤さんちでお昼を一緒に食べましょうよ」と呼びかけてくださるのは、いつも節ちゃんでした。そして、その日の料理は全て節ちゃんが用意してくれました。稲毛の節ちゃんの畑で採れたトマトやキュウリ、レタスはサラダに。お寿司は日頃宮澤さんが最良にしていた店のパック詰めを人数分。かなり重いのをリュックやゴカートで運んでくれました。

私は西荻窪駅前から出る荻窪病院行送迎バスに乗って、そこから善福寺川沿いに宮澤さんの家に向かえば、タダで行けました。その分、アイスクリームなどを買って行きました。

節ちゃんが善福寺川沿いの道を歩くと、どこからともなく野良猫・野良犬が出てきます。彼女はいつもトレーナーのポケットにエサを入れていて、野良ちゃんたちに振りまくので、ふだんは通行人のいないせまい道に人の気配がすると飛び出してくるのです。私が通っても、足音で通行人があると、同じように出てきますが、節ちゃんでないとなると、不満そうにまた茂みの中に消えていきます。その様子を見ても、節ちゃんがいかにたびたび、宮澤さんを訪ねていたかがわかります。

今回の節ちゃんの事故を、私は宮澤さんに伝える勇気がありませんでした。伝えても、私が彼女を支えて偲ぶ会に行くことはできないからです。私自身シルバーカーを離せない状態で、稲毛まで行くには、息子に仕事を休ませて、付き添ってもらったくらいでしたから。今頃は、宮澤美渚子さんにも節ちゃんの死が伝わって、彼女は涙にくれていることでしょう。節ちゃんが、死ぬ間際に思ったことも「美渚子さん、先に逝くけど、ご免ね」の一言だったと思います。

婦人懇談会の生き残りの羽賀育子さんは、今から6年前—2018年に亡くなった環境庁の役人、羽賀克己さんの未亡人—これっていやな言葉ですね。私も近藤信行の未亡人ですが、まるで「早く死ね」と言われているような気がします。育子さんの夫の羽賀克己さんは、役人らしからぬお役人で、過疎地帯の行政が進める地域振興のための開発に住民が踊らされないように、反対運動のやり方を教え、署名用紙から陳情書の書き方まで指導してくださって、当時日本山岳会自然保護委員会のメンバーだった私は、大変勉強になりました。「出世しようと思わなければ、かなりのことができますよ」と言うので、山岳会きっての美女の早川瑠璃子さんや私もファンで、年下の羽賀克己さんをわんぱく坊主の弟のように思って官舎兼事務所になっていた勤務先を訪ねました。私は目立つタイプではありませんが、早川瑠璃子さんは茶道の先生でしたから、いつも美しい和服姿で訪ねるので、かなり人目についたと思います。克己さんは上機嫌で彼女に健康体操を教えたりしていました。早川さんも「この着物いくらだと思います？着物、帯、長じゅばん、一式揃えて、古着屋で8000円よ」と、あっけらかんと言う方でした。

早川さんは自分の体の異変に気が付くと、好きで集めた山岳図書の全てを箱に詰め、読書家の吉田理一さん（魚沼市在住）宛に送りました。地元の高校の校長先生だった吉田さんは、早川記念文庫を建ててそれに応えます。そして宝酒造に就職した教え子を通して手に入れた「八海山」や「越乃寒梅」を、我が家宛に送ってくださいます。下戸の私なら預けても安心。緑爽会の集會に、なかなか手に入らないお酒が出るのは、吉田理一さんのお蔭。元とは言えば亡き早川瑠璃子さんが後輩のために遺したおくりものなのです。

宮澤美渚子さんは、ご主人の宮澤憲さんと二人してヒマラヤ登山に熱中した後、ご主人の工務店が倒産して暮らしに困っていました。そのため、日本山岳会の事務局に嘱託として勤めていたことがあります。おそらく憲さんの東京農大の先輩、織内信彦さんの口ききだったと思います。彼女が事務局にいと、新しくヒマラヤを目指す後輩たちに装備のこと、食糧のこと、ヒマラヤ登山全般のことが相談できて、随分役に立ったと思います。でも、その仕事は60歳で打ち切られました。これまでは、本人が希望すれば定年延長が認められる例が沢山あったのに。

私は、その理由が夫の憲さんが（旧）大町中学校出身者で組織された徒歩渓流会の幹部だったからと推測しています。日本山岳会としては、自らの内部事情が他の山岳団体に筒抜けになることを嫌ったのでしょう。徒歩渓流会だった宮澤憲さんの著書『ヒマラヤ・一つの峰の物語』を改めて読み直してみてもわかったのは、夫婦共にそのルーツは長野県小谷村であって、血縁関係が濃かったことを知りました。だから子供さんは一人息子だけだったのでしょうか。

また、この憲さんについては、昨年度『山岳』に掲載された山本良三さんの「山の風流使者伝 小島鳥水を再読して」を読むと、1987年の皇冠峰遠征は徒歩渓流会との合同登山で、遠征隊長は山本良三さんだったので、近藤も誘われて同行させてもらいました。この遠征では、徒歩渓流会がこれまでの実績をかわれて登頂するはずだったのに、当日の天候急変の兆しを見て「遭難者を出してはならない」と早々に撤退してしまいます。

良三さんは「ヒマラヤにロマンを求めて、はるばる中央アジアの奥深くまで来ながら、外部参加の隊員と意見が合わず。さりとて、議論するのもばかばかしいと感じていた私の身の引き方を間近に見ていた近藤さんは、さぞかし歯がゆい思いをされたことだろうが、私の気持ちを察して何一つ恨みがましい言葉を口にしなかった」とあります。

そして石と砂のベースキャンプで、二人は2ヶ月間過ごすのですが、この経験で信行はますます良三さんの人柄を愛し、終生変わることのない実の弟と思うようになったのです。

日本山岳会きってのモテモテ男だった山本良三さん、貴方が節ちゃんを知らなかった訳ないでしょう？貴方がアタックしても、やっぱり難攻不落でしたか？

晩年になって、体力の落ちた節ちゃんが同行してもらったのは弟の博之さんだったと聞くと、よくよく男との関わりを避けていたのがわかります。節ちゃんのツヤっぽい話、誰か知っていたら教えてください。

前に話した環境省職員だった羽賀克己さんが遺したものは、奥さんが彼の死後に編集した「生き物つれづれぐさ」50部のみです。いかにも素人っぽい編集・製本ですが、内容は克己さんの知識や経験がぎっしり詰まっています。これを書店に並ぶような本にしたい、というのが私の夢です。親しくしていただいている日本山岳会図書委員長、神長幹雄さん、本造りの名人、大森久雄さんにおねだりしようと考えています。

節ちゃんを偲ぶ目的で書きながら、裾野は多方面に広がってしまいました。でも、これら全般にわたって、節ちゃんの知恵と行動は関わっていたのです。

節ちゃんが精魂込めた婦人懇談会の志は、今も変わってはいません。かつての「婦懇」を知る人は、わずかに一人、羽賀克己夫人の羽賀育子さんあるのみ。現在は中央本線大月下車、駅から徒歩小一時間かけた猿橋の傾斜地で無農薬野菜作りに励む育子さんですが、彼女に会って、節ちゃんの思い出を語るのが私の大きな楽しみです。

敗戦後の日本山岳会で、多くの女性たちに生きる希望と勇気を与えてくださった山口節子さん、どうも有難うございました。貴女のことは生命ある限り忘れません。

+ + + + + ◆ + + 《ようこそ、ルームへ》 + + ◆ + + + + +

松本ぼんぼん

田村 佐喜子

ぼんぼんととも 今日明日ばかり あさっては お嫁のしな (お) れ草
しな (お) れた草を 櫓にのせて 下から見れば ぼたんの花
ぼたんの花は 咲いてはちるが 情のお花は いついつまでも
ぼんぼんととも 今日明日ばかり

七夕祭の済んだ次の日か、盆前の一晩か、二晩、松本の街中は、まだ薄明かりの夕べ、子供達のはずんだ声で賑わう。

幼児から小学6年生まで、幼い子は、母親等に抱かれたり、負ぶわれたりしながらも、小さなちようちんをかざして、それぞれの町を練り歩く。女の子は頭に大きな薄紙で作った髪飾りと薄化粧。時にはねだった^{たもと}長 袂 の浴衣に三尺帯を胸高に結び、赤いちようちんに火をともし、幼い順に列になり、その後先を、幼児を連れた大人達に守られ、声高く、歌声を響かせる。

これまた^{みじか}短 はんでん、短パンツ、鉢巻き姿の同じ年頃の男の子達は、手製のお神輿に青葉、杉葉を沢山載せて「青山様だい、ワッショイ、コラショ、ワッショイ、コラショ～」と、ぼんぼんの行列の前後を行ったり来たり、駆けて行ったと思ったら戻ってきたりと、大はしゃぎ、浮かれている。

町内の人々は、皆心待ちに家々の前や角に出て、御祝儀の小さな紙包みを手にして見守る。男の子達は、御礼の意を込めて家の玄関先に、ワッショイワッショイとお神輿を繰り入れ景気をつける。

大人の役員の方々は、見守りながらの交通整理と世話焼きで大忙し。

時には町角で、隣町の組々の連と出合い、お互いの町々の歌や、悪口歌も出たし、交流もあったようである。多くは知らないが、一つだけ覚えている。

“六九、六六、六九はいやよ、ロク^{ロク}ロク首のお化けが出るよ” (旧六九町の連と出会った時のいやがらせ歌)

暮れなずむ北アルプスの山脈^{やまなみ}を背にした松本城に映えての夏の一夜の風物詩である。

元々の謂れは、遠い奈良か京の町で、十代から二十代にかけての若い男女の出会いをおもねて、一晚踊り明かした名残りとか。それが本家の町の方では廃れ、松本と遠く東北の町の一か所だけに残され、引き継がれているとかと聞く。

今、日本での子供の少なさ、少子化の時代に、なんとかいつまでも残したい、残して欲しい、城下町、松本の夏の風物詩である。

私にとって何よりの心残りは、幼い日を松本に生まれ育ったと伺ったTさんと一緒に、いつかこの松本ぼんぼんを一夜口ずさんでみたかった、口ずさんでみたいと願っている今日この頃である。

～～《予告など》～～

秋の山行案内

恒例の秋の山行を東京・青梅の近くで実施します。青梅線宮ノ平駅から和田地区を通り長淵丘陵の自然林のアップダウンをゆっくりと歩き、赤ぼっこで奥多摩の山々を眺めて、鎌倉街道の一部、馬引沢峠、旧二ツ塚峠から天祖神社に下ります。初秋の丘陵地の4〜4.5時間の歩きです。青梅駅前で懇親会をします。

日時:10月7日(月)→悪天候の場合は9日(水)に順延します。

集合:9:30 JR 青梅線宮ノ平駅 参考:立川 8:48⇒(青梅行)⇒9:19 青梅 9:23⇒(奥多摩行)⇒9:26 宮ノ平

行程:宮ノ平駅 9:30→和田橋→梅ヶ谷峠入口・登山口→梅ヶ谷峠・愛宕山分岐→要害山→天狗岩分岐
→赤ぼっこ(昼食)→馬引沢峠→旧二ツ塚峠→天祖神社 →15:30 青梅駅

参加ご希望の方は、10月2日までに、石塚または小林に申し込んでください。

石塚

小林



安曇野山岳美術館などを巡る山旅(以下は基本案で、参加の方には追って詳細をお知らせします)

日程:10月27日(日)～28日(月) 宿泊:「ビレッジ安曇野」

行程:初日:朝早めに出発し(新宿発 7時のあずさ乗車)、小淵沢下車。ロッジ山旅の長沢さんに送迎をお願いし、ロッジ山旅のギャラリーで絵画観賞とティータイム

小淵沢から松本へ移動して昼食。大町へ移動して山岳博物館見学と、そこからの北アルプスの眺め。(悪天候の時は大町へ行かず安曇野アートラインなど)のち田淵行男記念館へ移動し見学。その後は歩いて宿泊地へ。入浴・会食(風呂は温泉ではありません)。

2日目:朝食後、ゆっくり目に出発し、安曇野山岳美術館で中村さんの企画展を観賞。午後は解散自由行動とします。(大町山岳博物館は月曜が休館のため、このような行程としました)

経費:上記プランでの想定で、交通費・宿泊費・入館料・タクシー代・昼食代・喫茶費で、約3万円です。

(大人の休日割引も活用) マイクロバス仕立てとなった場合は少し高くなるかと思えます。

お願い:人数によってはマイクロバス貸し切りも考えています。ついては人数確認のため参加を希望される方は至急、下記宛て連絡をお願いいたします。指定席などは未だ取らないでください。

大変急で恐縮ですが**9月2日までに**お願いいたします。

荒井

11月山行:この時期の恒例となった奥多摩を予定しています。

----- 編集後記 -----

今年の暑さは尋常ではなかったと思います。加齢もあると思いますが、昨年とは明らかに違いました。山も遠くなったと感じる昨今、K2西壁の吉報を期待していましたが残念でなりません。(荒井正人)

今年中高年の「疲労による行動不能で救助」のニュースが目立ちます。酷暑による熱中症か、日頃の鍛錬不足か分かりませんが、肝に銘じてそんなことにならないよう気をつけたいですね。(小林敏博)

「今森光彦 につぼんの里山」に行ってきました。美しい棚田や山など日本の原風景と言われる里山で人と自然—昆虫、動物、植物—が調和して生きている姿を捉えた写真190点がすばらしい。東京都写真美術館で9月29日まで。(石塚嘉一)

猛暑の夏、藤下さんと入笠山へ。ゴンドラで1780mまで行かれるのは、暑い夏には大きな魅力。お花畑には花が咲き乱れ、見たことのないたくさんのチョウがヒラヒラと。頂上から八ヶ岳のすべての頂を見ることができた。秋は涼しくなり、歩きやすくなるので、山行計画への皆様のご参加をお待ちしています。(横関邦子)

次号予告<10月24日発行の主な内容>10月山行報告、南川さん連載最終回など